

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任委員長選挙所信表明用紙

(四枚中の一)

中央常任委員長候補

法学部 三回生

佐藤 颯平

この度、二〇二一年度中央常任委員長に立候補いたしました法学部三回生の佐藤颯平です。この所信表明では、私がこれまで学友会活動を続けるうえで得た経験と考えてきたこと、今後一年間で成し遂げたいことを記述します。

私は入学してすぐに学友会に足を踏み入れ、二回生までは法学部自治会に、三回生は全学自治会に所属して活動してきました。法学部自治会では、二回生次の途中まで副委員長、途中から委員長を務め、三回生次には新歓実行委員会副委員長を務めました。

法学部自治会時代には、「ビジョン」「コミュニケーション」「準備」の重みを学びました。委員長がビジョンを明確に持ち、組織全体の方向性を共有できなければなりません。そのためにはコミュニケーションをとる必要があります。これがわかるまで、法学部自治会は学生自治組織としての活動以前の問題を多く経験しました。また、様々な活動を行う上で、準備の重要性をひしひしと感じました。数時間の会議の場でできることは、会議以外の時間に準備したことのみです。また、何から行う必要があるのかを間違えないため、無駄な労力を費やすことも減ります。さらに、入念な準備によって、必要のない作業が生まれにくいため、ビジョンがぶれません。

学部を超えた活動がしたいという思いから、三回生から中央常任委員会に入りたいと考えていましたが、全学自治会の執行委員となりました。これは学部の域を超えた活動を長期的にしていくには、「つながり」が大事だと感じ、それを形成するために全学自治会を選びました。現在の学友会は、執行委員という立場に中央委員会の議決権はありません。私は学友会の意思決定の過程をほとんど知らずに一年間を過ごしました。この一年間は全学自治会や法学部に関係のない意思決定は、主体的に調べないと分かりませんでした。二〇二〇年度は新型コロナウイルスの影響で激動の一年となり、大学も学友会も対応に追われま

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任委員長選挙所信表明用紙

(四枚中の二)

した。この一年間の学友会の外からの視点は、非常に価値のあるものだと思います。

この三年間の経験を活かし、二〇二一年度常任委員長として実行していきたいことは、「学友会組織の見直し」です。学友会は学生による学生のための学生自治組織を謳っています。しかし、ここ数年の学友会活動は学生自治組織として正常に機能しているのでしょうか。私は、三年間の学友会活動の結果、学友会の力の大きさを感じました。その力を自治組織として正常に利用できているのでしょうか。数%の学生による投票によって選ばれた私たちが、数%の回答率のアンケートを手に学生自治を謳う現状に、学友会の危うさを感じます。また、学友会の運営状態にも問題が多くあると思います。現在、少数の学友会員が自己犠牲のもとに多くの業務を抱えています。やりがいを持ち主体的に活動をすることは大切なことといえますが、少数の学友会員が身を削り、他の時間を割き、学友会活動を行うには限界があります。これらの問題点を抱えたままでは、学友会中央パート構成員は減少の一途を辿り、学友会活動が破綻することが容易に想像つきます。これを解決するには、学友会組織全体の根本からの見直しが必要不可欠であると考えます。学友会組織の見直しには、以下三点を柱として活動したいと考えています。

『業務執行の効率化』

効率化として、「業務の再分配」を行いたいと考えています。私は三年間で、法学部五者懇談会、衣笠キャンパス懇談会、全学協議会を経験してきました。この3つの会議をとってしても、学部レベルで検討するべき議題なのか、キャンパスレベルなのか、全学レベルなのか、うまく区別されていないと感じます。例えば、教学面では専門科目に関する問題は学部レベルで行っていくべきだが、一般教養科目などについてはキャンパスレベル、全学レベルで検討していく必要があるのではないのでしょうか。

また、二〇二〇年度は、中央パート構成員が主体的に動けるように環境が整備されました。しかし近年の学部自治会の総括や方針には他団体との連携が必要不可欠な課題も見られます。全学的に協議をしなければならぬ課題については、

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任委員長選挙所信表明用紙

(四枚中の三)

全学自治会と連携をとる必要があります。二〇二一年度は、中央パート構成員が主体的に動けるように、情報共有が欠かせないと考えます。特に学部自治会同士の情報共有だけでなく、上下の情報共有にも力を入れたいと考えています。

『発信』

発信とは、学友会活動を全構成員に発信するという、二〇一九年度からの継続的な学友会活動の一つのテーマであり、長期的に解決する必要があります。

二〇一九年度には様々な情報発信の仕組みが整備され、二〇二〇年度はそれをどのように活用していくかに重点が置かれました。しかし、そもそも学友会を知らない学生、学友会に対する知識が薄い学生は多いです。この常任選挙も今の発信方法では、どれだけ学生に届いているでしょうか。何人がこの所信表明を見たでしょうか。そのため、二〇二一年度は、学友会の認知度の低さを考慮したうえでの情報発信方法の検討に重点を置くべきです。学部自治会だけでなく、多くの団体が所属する課外系パートや、大学全体を巻き込む力のある事業系パートなどとも協力し、発信方法を検討していきたいと考えています。

『全学協議会』

二〇二一年は全学協議会があります。二〇二〇年は新型コロナウイルスの影響で、学生の活動は制限され多くの学生が新たな生活スタイルに移行せざるを得ませんでした。大学には通えず、自宅からオンラインで授業を受け、毎週多くの課題を提出する。退学検討者の増加や、学生の鬱などは大きな社会問題にもなりました。大学の対応や学生自身のキャンパスライフ等に対して、一般学生からも声があがるようになりました。また、立命館大学は新たに学園ビジョン R2030 に向かって進んでいきます。

このような時期に公開全学協議会があります。現在の学友会の方針は、「防御と撤退」です。私はこのような時期だからこそ、学友会全体として力を入れて、戦っていくべきだと考えます。

「学友会組織の見直し」は学友会の発展を考えるのであれば、取り組まなければ

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任委員長選挙所信表明用紙

(四枚中の四)

ばならないと考えます。全学協議会があるからこそ、二〇二一年度は学友会をより良いものにできる年だと考えています。また、この実現には現在の学友会を支援してきた皆さんの協力が必要となります。皆さんとともに、学友会をより良いものにできるように取り組んでまいります。よろしくお願いいたします。
以上を私の所信表明とさせていただきます。

投票日 二〇二一年三月二十六日

立命館大学学友会中央常任委員会

同選挙管理委員会